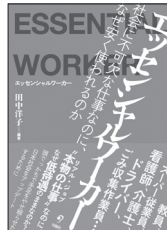


田中洋子編著

『エッセンシャルワーカー』

——社会に不可欠な仕事なのに、
なぜ安く使われるのか』



評者：禿 あや美

本書は、日本で労働者が「安く」使われてしまう状況とその原因、解決法について、「エッセンシャルワーカー」という切り口を軸に議論したものである。エッセンシャルワーカーは「他者の助けとなり、人々に便益をもたらし、社会的価値がある」(9頁)仕事を担っているが、それに与えられる報酬は少ないというデヴィッド・グレーバー(2020)の議論を踏まえながら、日本のエッセンシャルワーカーが低賃金で不安定な状況に置かれている「常識」を相対化することを目指している。本書は、エッセンシャルワーカーについて「私たちの日々の生活を着実に支える、社会の潤滑油のような存在」(10頁)とし、その仕事は外から見えやすく、仕事内容を私たちがよく知っているように思えるが、実際にはそうではないと指摘している。というのも、これらの仕事を担う人々の処遇が複雑化しているためである。

たとえば、ゴミ収集を行う人々には、現業職の正規公務員、清掃局と委託契約を結んだ民間業者の運転手、委託事業者の労働者、労働者供給事業から日々雇用される派遣労働者などが含まれている(第Ⅱ部第4章)。同じ作業を共同で行うわずかな人数の中でも、処遇は分断さ

れ、労働条件はそれぞれ大きく異なる。市民として私たちはこれらのサービスを日常的に経験しているが、そのような複雑化した労働現場を知っているわけではない。そして、こうした分断された労働の状況は、職種や業種ごとの固有の経緯を踏まえ構造化されている。だからこそ、これらの問題は調査や研究を経て議論される必要がある。しかし、日本では調査・研究が手薄で、議論が十分になされていないまま、主に2000年代以降に社会にとって不可欠な仕事の多くが、非正規労働者の活用や業務委託を通じて低賃金・不安定収入へと変わってしまった。この状況が、低賃金社会日本を構造的に作り出し、日本の社会経済の基盤の長期的弱化をもたらしている(22-23頁)。これが本書を貫く問題意識である。

本書で取り上げられるエッセンシャルワークには、幅広い産業や職種が含まれる。そこで本書は、エッセンシャルワークを五つに類型化したうえで、三つの観点から論じている。第一に、いくつかの産業や仕事に即し、その仕事の内容、働き方とその条件、そしてそれが働いている人にもたらしている状況を具体的に掘り下げること、第二に、いつから、どのようにしてエッセンシャルワーカーの働き方が悪化したのかを分析すること、第三に、国際比較を通じて、これらのエッセンシャルワーカーの状況を改善するための方途を示すことである。これらの議論を通じて、「エッセンシャルワーカーの低処遇化を当然のことにように受け止めており、それが日本全体にどれほどマイナスをもたらしてきたかを十分意識していない」(22頁)日本の「常識」を相対化することを目指している。

本書の構成は次のとおりである。序章では上記の問題意識が述べられている。第Ⅰ部では、スーパーマーケット、外食チェーンが取り上げられる。まず日本の状況を歴史的・構造的視点

を大事にしつつ明らかにしたうえで、ドイツを比較対象としている。第Ⅱ部では公共サービス部門で進む予算の削減と、それに伴う非正規化が述べられている。対象とされるのは、自治体相談支援員、保育士、教師、ゴミ収集作業員である。続く第Ⅲ部では、病院・介護を中心とした女性が多く働く「ケア職」が取り上げられている。ここでも日本とドイツの状況が比較検討されている。第Ⅳ部では、個人事業主化によって処遇が下がっている運送、建設工事、アニメーション制作の現場が取り上げられる。そして第Ⅴ部では、これらの議論をまとめることで、エッセンシャルワーカーの働き方が悪化したメカニズムと、それらを改革するための展望が論じられている。各部各章では異なる仕事の現状・歴史・展望がそれぞれ論じられており、それらをまとめることは紙幅の都合で叶わない。そこで以下は、本書で明らかになったことのうち、評者が特に印象に残った点を中心に紹介しつつ、本書の意義と今後の論点を挙げる。

本書の特徴と概要

本書の特徴は、第一に、「エッセンシャルワーカー」という概念を軸に分析枠組みを設定したことの重要性和有用性が示されている点にある。雇用労働の格差や貧困に関する議論を進める際の難しさは、こうした議論自体が新たな分断を生む場合があることである。たとえば、正社員と非正社員という雇用形態の違いをめぐる格差を議論すると、賃上げの原資を正社員と非正社員でどう分配するのが焦点になり、結果として「正社員を犠牲にして非正社員の賃上げを実現する」といった労働者内で分断を深める言説に絡め取られることがある。また、ジェンダー格差の議論が男女の対立構造に単純化されたり、職場における子育て支援策の議論が子育て中で「支援される側」と、彼らを「支援す

る側」という分断を招いたりすることもある。このように、雇用労働の困難さを論じる際、その構造的要因に議論を集中させないと、逆にその困難を生む構造を強化する結果にもなりかねない。それが、本書で著者らの述べる「失われた30年間」の中で、私たちが体験してきたことの一部でもあり、それこそが、本書で問題とされていることでもある。

こうした背景の中で、本書が掲げる「エッセンシャルワーカー」という分析枠組みの有効性が示されている。エッセンシャルワーカーの処遇改善は、その労働者自身の問題であると同時に、その仕事によって支えられる私たちの生活の問題でもある。これらを議論し改善しなければ社会そのものが成り立たないという共感と危機意識を喚起することに本書は成功している。このように、「エッセンシャルワーカー」という概念を用いることで、新たな分断を生むことなく、議論を前向きに進める基盤を構築している点が本書の第一の特徴である。

第二の特徴は、「仕事の内容」を起点に議論を進めている点である。このアプローチにより、まずどのような意味でそれらが「不可欠」な仕事であるのかが読者には明確になる。そのうえで、第三の特徴として、国際比較や法律・制度、歴史に基づいた事例を示しながら、エッセンシャルワーカーの処遇が劣悪であることを「常識」として受け入れてしまっている私たちの見方を覆している。これら第二・第三の特徴が特に発揮されているのが、第Ⅰ部のスーパーマーケットと外食チェーン店に関する議論である。この部分で得られるエッセンシャルワーカーに対する共感や視点が基盤となり、第Ⅱ部以降の議論や理解を深めることができている。

たとえば、第Ⅰ部で明らかにされたのは、同じ仕事をしている労働者の処遇が、国によって大きく異なるという事実である。スーパーマ

ケットや外食チェーンの仕事は、基本的には企業や国を超えて同じである。スーパーマーケットでは、店員が発注・管理し、陳列した商品を消費者がレジまで持って行き、会計する。一方、マクドナルドなどの外食チェーンでは、店舗レイアウトや食品の品質、調理手順が統一され、同じサービスを提供している。それにもかかわらず、ドイツと日本では労働者の処遇、賃金水準、労働者構成が大きく異なる。

日本のスーパーや外食チェーンでは、少数派の正社員（主に男性）が長時間勤務や転勤を伴う働き方をし、大多数の労働者は主婦や学生のパート・アルバイトで構成されている。店舗運営責任者であっても時給は1,000円程度であり、店長の裁量によって時給が個別に変わることもあり、透明性に欠けている。労働者は働く時間帯等の自由を求めパート・アルバイトとしての働き方を選べば低賃金となり、収入を得るために正社員を選ぶと働き方の自由がなくなるというジレンマに置かれている。他方、ドイツでは正規・非正規の区別が少なく、働く時間を自由に選べるうえに、労働者の8割が正社員であり、多くが長期勤続している。管理職への昇進も内部から行われ、産業別に決められた仕事の内容と責任、知識技能に応じて等級化された協約賃金が支払われ、その内容は公開されている。最低賃金額の上昇が協約賃金全体に影響を与え、最低賃金額の引き上げスピードも速い。

同じ仕事をしながらも、ドイツでは労働者の処遇がより良い形で構築されていることが示されている。本書は仕事を議論の起点にしながら、国際比較を通じて、日本の労働者の処遇の劣悪さを当たり前のものとしたり、改善をあきらめたりするのではなく、よりよいものに変えることが可能であり、そうした道を選択することもできることを明確にしている。

第Ⅱ部から第Ⅳ部では、日本という社会の文

脈の中で、エッセンシャルワーカーがどのようにして現在の困難な状況に至ったのかを浮き彫りにしている。第Ⅱ部では、財政難や行政ニーズの増加を背景に、公務部門での正規職員削減が進み、それを補う形で非正規職員が増加したことが議論されている。例えば、児童虐待対応窓口や婦人相談、生活保護ケースワーカーといった住民に直接相対する専門的な業務が、行政の本来業務である行政行為とはみなされず非正規化されていった。このような専門性の高い仕事であっても、不安定で低賃金の職に区分され、軽視されている現状がある。また、保育士の賃金経験や熟練に応じて上昇しにくくなっている点も象徴的である。

第Ⅲ部では、医療・介護分野に焦点を当てている。訪問介護の労働は、制度改変によって細切れかつ低賃金の業務へと変化していることが指摘されている。介護事業者の収益が悪化する中で、介護労働者の労働条件も悪化し、人手不足が深刻化している。また、ドイツでも看護・介護分野で人手不足が問題となっているが、日本とは異なり、労働条件の改善や「総合ケア職」という専門職としての地位向上が試みられている点が紹介されている。

さらに第Ⅳ部では、運送、建設工事、アニメーション制作といった多様な職種が取り上げられている。これらの職種では、業界特有の多層的・重層的ピラミッド構造が労働条件の悪化を助長している。例えば、個人事業主化が進むことで、労働者が雇用契約ではなく請負契約や個人事業主として働く形態が増え、雇用保障や適正な評価がない状況が常態化している。これにより、労働者の処遇はますます劣化し、業界全体の持続可能性が危ぶまれている。このように、日本では専門職が尊重されない社会構造に陥っていることが示されているのである。

今後の論点

本書の議論を踏まえ、今後深めていきたい論点として以下の点が挙げられる。第一に、日本の雇用システムに関する議論の再検討が必要であることである。従来、日本型雇用システムは「メンバーシップ型」とされ、無限定正社員を中心とした長期雇用と安定した賃金が特徴とされてきた。しかし、本書ではファストフード業界の日独比較を通じて、「ジョブ型」であるドイツのほうがむしろ「日本的」であることが示されている。ドイツでは、労働者の大半が正社員であり、内部昇進を通じてキャリア形成を行う仕組みが整備されている。賃金はジョブの内容に応じた等級制度に基づいており、透明性が高い。他方、日本ではアルバイトやパートが中心であり、正社員であっても長期雇用やキャリア形成が困難な場合が多い。このことから、「メンバーシップ型」や「ジョブ型」のいずれが望ましいかという単純な議論ではなく、どちらの型であってもより良い働き方を実現するために必要な要素を具体的に議論する必要があることがわかる。またその際には、本書でとりあげられた専門職、なかでも AI などの新技術に置き換えられない専門職を、社会や組織内でどのように位置付けられるのが鍵となる。彼らが適正に評価されることは持続可能な社会につながる。雇用制度のあり方や専門職の社会的位置付けを議論する際に、このエッセンシャルワーカーに関する議論は大いに示唆を与えている。

第二に、労使交渉のあり方も重要な課題である。ドイツでは、協約賃金が雇用形態や労働時間に関係なく全労働者に適用されており、最低賃金の引き上げがすべての労働者の賃金に波及させる仕組みが整っている。他方、日本では雇用形態による分断が、労働者の交渉力を弱める要因となっている。第Ⅰ部のスーパーマーケットの議論にもあったように、産業政策と労働政策のあり方と、日本の労使関係の組み合わせ

が、現在のありようを生み出している。産業への規制の「自由化」は日独双方で共通に生じているが、その結果生まれた労働者の分断と低処遇は日本固有のものである。雇用制度の型と日本の労使関係・雇用関係のあり方を踏まえながら具体的に議論してゆく必要と、雇用管理区分ごとに人事制度を分立させている日本の制度のあり方こそが、雇用関係における労働者の交渉力を削いできた面が強いことが、本書の議論によって改めて浮き彫りとなっている。

このように、本書は、エッセンシャルワーカーという概念を前面化させることで、新たな分断の言説を生み出すことなく、格差や貧困を議論することに成功した。しかし、労働環境や労働条件の改善が、今後、エッセンシャルワーカーの生み出すサービスや商品の価格に転嫁させる議論に結びついたとたんに、その機運を弱めてしまうのではないかという懸念もある。第Ⅳ部のトラックドライバーの議論では、トラックドライバーの労働改善には、運送会社の責任のみならず、荷主の理解や協力が不可欠と指摘されている。良好なサービスにはそれなりの価格が必要で、労働者の専門性に見合った対価を支払う必要があるのであり、それによって生産者と消費者の双方の生活が守られるのだ、という理解を私たちの社会がいかに深められるかが、今後を展望するうえでの鍵となるのではないだろうか。

（田中洋子編著『エッセンシャルワーカー——社会に不可欠な仕事なのに、なぜ安く使われるのか』旬報社、2023年11月、392頁、定価2,500円＋税）

（かむろ・あやみ 埼玉大学大学院人文社会科学研究所准教授）

【参考文献】

デヴィッド・グレーバー（2020）『ブルシットジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店